「一汁山菜」がキラーコンテンツ
――海、川、山、田畑に囲まれた新潟県村上市の「いろむすびの宿」

新潟県最北・最東の日本海に面した村上市。面積は 1,174.26km²で県内最大だ。人口は約 6 万人である。北限の茶どころとしても有名であり、三面川（みおもてがわ）・荒川（あらかわ）の鮭のほか、村上牛も名物としてある。

そんな海、川、山、田、畑に囲まれ恵まれた地域資源を持つ村上市（写真１・２）に、古民家をリノベーションして、2019 年 4 月に開業した「いろむすびの宿」がある。筆者は 2019 年 7 月 26 日～28 日、この宿に滞在した。今回はその体験も踏まえて紹介したい。

写

写真１：一面の田園風景

写真２：鮮魚センターもある岩船港

地域と場づくりの面白さを体験し、地方への移住を決意

宿を経営する古林拓也（ふるばやしたくや）さんは、京都府出身。東京都内の IT 企業に勤務していた傍らグロービス経営大学院に通い、MBA を取得した。

古林さんは、東京都三鷹市に数年間住んでいたが、住居やこどもの保育所の保育料の高さ、加えて夫婦ともに仕事に忙殺される生きにくさを感じていた。

「大学院時代、ご縁があって滋賀県近江八幡市で、『地域資源活用塾』というプロジェクトを経験させていただきました。地域の人たちが、地域資源を活用して、事業を生み出していくというテーマでした。そこでの経験を通して、地域と場づくりの面白さに気づき、将来的に自分の仕事としてやっていきたいと思いました」と古林さん。

その後、「過疎の課題を抱えている島根県雲南市に移住して、NPO 法人で地域づくりの仕事をしてみないか？」という誘いがあり、ぜひ行ってみたいと思ったという。しかし、その時、妻は第 2 子を妊娠していた。夫婦ともに縁がない地域へ行くことへの不安を妻から告げられ、妻の実家で話し合いの場がもたれた。そこで村上市に住む妻の叔母が、「それなら村上で一緒に事業をしないか？」と提案してくれたと言う。叔母は、個人事業主として村上市の山菜を販売して事業を行っており、さらに空き家を購入し、まちづくりに活かそうとして

いた。

その叔母の提案が、古林さんの背中を押した。2018 年 4 月に家族で村上市へ移住し、叔母との共同出資で「株式会社いろむすび」を立ち上げたのである（写真３）。

写真３：株式会社いろむすびの古林拓也さん

写真４：古民家をリノベーションした「いろむすびの宿」

同社は以下の３つの事業を掲げている：

1. 地域商社事業「いろむすび山菜屋」
2. 田舎体験旅館事業「いろむすびの宿」（写真４）
3. 場づくり事業「ひとむすび」

一汁山菜の「いろむすびの宿」

特に古林さんが着目したのが、村上市の山菜だった。湿地帯で粘土質の土壌環境が整っている村上市の山では、山菜が豊富に採れる。山菜は山野に自生し、食用にする植物の総称だ。市場には栽培ものの山菜が存在するが、こちらでは自生している天然ものを採取する。収穫時期は 3 月～4 月である。ここの宿では、山菜収穫体験もオプションとして提供している。

古林さんは「野菜の手前は、山菜」とうたい、野趣あふれるこの食材の魅力を広く伝えている。山菜は、丁寧に人の手を入れることによって、佃煮や天ぷらなど風味豊かな郷土料理に変身する。それを担ってくれるパートナーは、60 代・70 代の地元の「かかさ（おかあちゃん）」たちであり、彼女たちもまた、素晴らしい地域資源なのである。実際、筆者もこの宿で、何人かの「かかさ」と交流を持たせていただいた（写真４）。朝日とともに活動し、夕日が沈むと活動が終わる。そんな 1 日を過ごす、彼女たちの自然でおおらかな姿と心を

こめて作ってくれる山菜料理に癒される。また彼女たちは東京へ山菜の展示販売にも出かけるという。大変なバイタリティの持ち主だ。

写真４：山菜料理を振る舞ってくれた「かかさ」（右）と筆者（左）

　また宿泊時に振る舞われた「一汁山菜」と称した豊富な山菜メニューには驚いた。色、形、味、食感、すべてにおいて自然を感じ、自然に生かされていることに思いを馳せながら食を楽しむことができる（写真５）。また、新潟県は日本酒どころということもあり、地酒もふんだんに用意されている。各食材にあった酒を古林さんが選んでくれるのも魅力である（写真６）。

写真５：食卓に並ぶ豊富な山菜メニュー

写真６：食材にあう地酒の数々

自然に囲まれた地で快適なテレワーク

写真７：テレワークで観光をしながら仕事をする

筆者はこの宿に滞在し、半分観光、半分仕事を楽しんでいた。朝５時になるといっせいに小鳥のさえずりが屋外から聴こえ、まばゆい朝日の輝きとともに、自然に目が覚める。その後、朝食ができるまで、１時間ほど近隣の田畑を散歩し、朝食後は２時間ほどテレワークで原稿を書く。Wifi が整備されているため、東京、ワシントン、スイスと滞りなくメールを送り原稿の進捗報告をしていた（写真７）。

そしてお昼から観光で出かけ、夕方に戻って再度テレワーク。正味１日４時間くらいだろうか。それでも自然に囲まれ心身ともにリラックスできたせいか、滞在期間中、原稿２本を書き上げることができた。生産性は極めて高かったように思う。

筆者は田舎暮らしをした経験がない。横浜市で生まれ、東京都数か所で育ったからだ。し

かし、これからは筆者のような出自の人間でも、テレワークで数日、数週間、数か月、気に入ったところに滞在しながら仕事をすることもできるだろう。移住、定住とまではいかなくても、ある地域で観光し、宿泊し、情報を拡散すれば、そこの地域経済にも貢献することができる。

「旅をしながら仕事をする」――そんな楽しいひとときを余すことなく体験できた「いろむすびの宿」。もう一度、「かかさ」に会いに訪れたくなる宿だ。

＜参考資料＞
村上市公式ホームページ
http://www.city.murakami.lg.jp/
いろむすびの宿
https://guesthouse.iromusubi.biz/
いろむすび Facebook ページ
https://www.facebook.com/iromusubiCoLtd/
いろむすび山菜屋 Facebook ページ
https://www.facebook.com/iromusubisansaimarche/
【新潟直送計画】いろむすび山菜屋の通販　ギフト　お取り寄せ
https://shop.ng-life.jp/iromusubi/
グロービス経営大学院
https://mba.globis.ac.jp/
（2019 年８月６日確認。）

文/写真　奥山 睦